

近世後期における一橋徳川家の「隠居所」財政

—寛政一・二年度財政帳簿の分析を中心に—

東野 将伸*

はじめに

御三卿の一橋徳川家文書には、各年度の財政状況の全体像を記した帳簿が一〇冊（八半分、寛政一〇（一七九八）、同一二（二冊）、天保八（一八三七）、嘉永元（一八四八、二冊）、安政元（一八五四）、同三、元治元（一八六四）、慶応元（一八六五））残存しており、それらは「米金納拂御勘定目録」等の標題がある。このうち寛政一・二年度の一冊を除く九冊は、一橋家本邸の財政帳簿（以下、「一橋勘定目録」と略記）である。残る一冊は「神田橋御屋敷」——一橋家二代当主治済の「隠居所」の財政帳簿（以下、「神田橋勘定目録」と略記）であり^二、末尾の作成年月日は享和二年（一八〇二）九月で、「神田橋 寛政十二 申年米金納拂御勘定目録下札帳」との標題が表紙に記されている。

このような近世中後期の領主家内における「隠居所」の財政帳簿についての分析は、近年の藩財政研究においても、管見の限りほとんどなされていない。田中誠二氏は、萩藩財政の分析を通じて、文政七年（一八二四）に萩藩主斉熙が江戸葛飾邸を「隠居所」として藩の「大御所」的存在となり、「斉熙付きの当役が任命され、葛飾邸にも番手の家臣が配置され」たこと^三、「斉熙の隠居所葛飾御殿と和姫入典に

伴う桜田新御殿への番手人数増」による支出の増大があり、これは「斉熙の「大御所」政治の弊害の一つ」であったことを述べているが^四、「隠居所」財政の内実については分析していない。伊藤昭弘氏は、複数の藩の經常収支と別会計の分析を通じて、藩財政窮乏論の見直しを提起しており^五、特に萩藩と佐賀藩において藩政の財政とは異なる藩主家の大規模な財政が存在し、この剰余の維持・拡大が目指されていたことを指摘しているが^六、藩主家の構成員（藩主、藩主家族、隠居等）と各会計部門との関係等の点に踏み込んだ分析は行っていない。

このような研究状況にある要因の一つとしては、史料の制約以外にも、例えば武士家族法の研究では、武士の家内部における隠居の権限は限定的なものと評価されており^七、「隠居所」やその財政には研究題材としての積極的な意義を見出しにくい側面もあったと思われる。一方で、主君「押込」についての研究など、大名・武士の隠居にかかわる慣行については一定程度注目が集まっており^八、さらに近世後期の一橋治済・幕末期の徳川斉昭の活動など、領主家の家政や幕政に隠居した当主が大きな影響力を持つ事例も散見される^九。このような一見相反する研究状況をふまえるならば、領主家における隠居・「隠居所」

近世後期における一橋徳川家の「隠居所」財政—寛政一・二年度財政帳簿の分析を中心に—

東野 将伸

については、財政面を含めた多様な観点から検討されたうえで、その位置づけが定められるべきと考える。

「隠居・隠居所」の財政にかんして、幕末期の隠居の財政基盤や「表」への財政支援行為については、岩崎義則氏による平戸藩を題材とした研究がみられるものの^{一〇}、このような事例研究はいまだ僅少であると思われる。また、岩崎氏の研究においても、隠居財政全体の収支の項目や数値は明らかにされていない。平戸藩の事例のように、「隠居・隠居所」による財政支援行為が確認されるということは、領主財政において「隠居所」が独自の役割を有していた場合があることに加えて、藩財政運営の一方策として「隠居所」財政が設定および活用されていた可能性があることや、領主財政の全体像をとらえる際に、「隠居所」財政も視野に入れた分析が必要であることを示しているといえよう。

一橋家の財政については、これまで辻達也氏、竹村誠氏、筆者などの研究が発表されているが、上記の「神田橋勘定目録」については分析対象とされていない^{一一}。この背景には、前述の通り「神田橋勘定目録」が一冊しか残存しないという史料制約が大きいとみられる。加えて、竹村氏の研究の前提となっている辻氏の研究においては、一橋家財政の幕府への依存という見方が強かったこともあって^{一二}、一橋家財政そのものを主な分析対象として取り上げることや、ましてや「隠居所」の財政運営のあり方を個別に検討する意義が認識されなかったものと思われる。しかし、拙稿で述べた通り、一橋家財政は幕府と密接な関係を有しつつも、幕末期には所領との関係の深化がみられる点

や、莫大な債権を資産として有していることなど、領主財政論、領主―領民関係論の研究対象として、多くの注目すべき点がみられる^{一三}。

また、「神田橋勘定目録」と同じ寛政一二年度の状況を記した「一橋勘定目録」も残存しており^{一四}、両者を対比させることで、一時期のものではあるが、「隠居所」が存在した寛政末年―文政期の一橋家全体の財政状況に迫ることができる。そのため、本稿での分析を通じて、寛政末年における一橋家財政の全体像とその特徴を明らかにするとともに、領主財政における「隠居・隠居所」の位置づけ、複数の会計部門の相互関係^{一五}等についての一事例を提示することができると考える。

以上の認識のもと、本稿では、近世後期における一橋家の「隠居所」の財政構造と一橋家財政全体の中での比重や機能、「隠居所」財政に対する一橋治済の認識等を明らかにしていくことで、日本近世領主財政論に対する論点の提示を試みていく。なお、本稿は前掲拙稿の分析結果の補足という性格の強いものであり、近世後期―幕末期における一橋家財政全体への筆者の見解については、前掲拙稿と本稿の両論文を参照いただきたい。

第一章 一橋家の家政機構と「隠居所」

第一節 一橋家の家政機構と財政構造

本節では、先行研究の記述にもよりつつ、一橋家の家政機構と一橋家本邸の財政構造を確認しておく。

まず、一橋家の所領は、延享三年（一七四六）に播磨・和泉・甲斐・

武蔵・下総・下野の一〇万石余が与えられることで成立している^{一六}。これ以降、幕末期までに一橋家では五度の所領替が行われており、特に文政一〇年（一八二七）には大規模な所領の変更がみられた。

一橋家の職制については、家政を統括する家老の下に重職として「八役」が設置され、「八役」の一つである「用人」の下に「目付」や「納戸頭」等の役職がおかれたことなどが、辻達也氏、武子裕美氏、田中丈敏氏によって明らかにされている^{一七}。財政運営に深くかわる「館入」については、大坂町人が西国所領の蔵元を務め^{一八}、幕末維新期には「京都御用達」がおかれている^{一九}。江戸には江戸掛屋（両掛屋）がおかれ、この一名は中井新右衛門であり、他に江戸で年貢米を扱う「蔵行事」がみられた^{二〇}。

一橋家本邸の財政構造について、拙稿の内容をまとめると^{二一}、本邸の財政は「金方」と「米方」に分かれており、「金方」には「一般会計」と「別記項目」（債権・臨時支出）の二区分があった。従来の研究では、一橋家財政は慢性的な「収支不均衡の体質」とされてきたが^{二二}、「一般会計」収支への評価に再検討の余地があり、また「別記項目」がほとんど分析されてこなかったため、拙稿でこれらの点に注目しつつ検討を加えた。その結果、「一般会計」では単年度収支が黒字の年が複数みられ、飢饉時や幕末期に赤字を計上していた点、一方で一九世紀には「別記項目」の合計額が二〇万両以上となり、一橋家全体では巨額の債権・資産を保持していた点が明らかになった。全体として、一橋家財政は一八世紀後期には幕府からの拝借・拝領金に大きく依存す

る体制であったが、一九世紀前期（文政）にかけて、所領替による増収に加えて幕府への「預け金」開始による利子収入が現れ、天保改革期以降は、幕府との関係の後退・所領との関係の深化がみられた。

第二節 一橋家における「隠居所」

一橋家の当主と「隠居所」について^{二三}、初代当主宗尹は当主在任のまま死去しており、第三・八代当主は早世のため隠居していない。そして、九代当主慶喜は安政五年（一八五八）七月五日に登城停止処分を受け、その後同六年八月二七日には「隠居・慎」処分に改められ、万延元年（一八六〇）九月四日に同処分が解除（親族その他との面会、文書往復は禁止）された後^{二四}、複数の役職を経て一五代将軍に就任している。一〇代当主茂栄は、当主時に版籍奉還・廃藩となっている。なお、九代当主慶喜の「隠居・慎」処分については、隠居となったものの別の当主が立てられたわけではなく^{二五}、一橋家本邸と異なる「隠居所」が定められた形跡もみられない。そのため、近世の一橋家において、本邸と並存するかたちでの「隠居所」は、二代当主治済（宝暦元・文政一〇年（一七五一）一八二七、寛政一一年（一七九九）隠居）の存世時にのみ設置されている。

治済は寛政四年正月まで一橋邸に居住し、飯田町屋敷の拝領後、そちらに移動している^{二六}。しかし、飯田町屋敷は同年七月に類焼しており、九月に神田橋邸を拝領し、飯田町邸地を返納している。そして、同年一〇月・文政一〇年の死没まで神田橋邸に居住している。

治済の居所の移動にかんして、寛政四年の飯田橋邸への移動に際しての治済「御書」をみていく。なお、本稿で引用する史料の傍線は筆者（東野）によるものである。【史料1】は、最樹院（一橋家二代治済）から子弟や家臣への指示書・教訓書類をまとめた帳簿のうちの一冊である「最樹院様御教訓御書写 全」に収録されたものである。

【史料1】^{二七}

寛政四子年正月十九日近と飯田町御屋敷江御逗留被為入候ニ付治
国公江御書

一公辺勤向之儀無懈怠出精可被致事

一兄弟者勿論間柄之面と睦敷可被致事

一家政之儀も追と相讓候存寄ニ付、通例之儀者家老共与遂相談入

念可被取計事

一諸役人初末と追進退之儀依怙最負無之様精と取計方被見習候様

ニ与存候事

一日と調所江出席可被致事

一諸芸稽古之儀無油断弥出精可被致事

一質素節儉之儀可被相守事

一諸士召仕方心を可被用事

一作法向之儀厳重行届候様世話可被致事

一廉立候儀者役人共其元江も伺可申候得共、尚又此方江も伺候
積候間、兼而被心得候様存候事

右之條と無忘却可被心掛候、以上

同日御家老江

一飯田町屋敷逗留中、家政之儀者通例之儀者

刑部卿江伺取計申候ニ付而者、別而入念伺取調取計可申事

一未若年之儀ニも候間、生立之儀及心ニ候丈精入、側懸り等申合
候而可取扱事

一刑部卿勤向之儀無懈怠様心附可申事

一心得違等其外何ニ而茂不宜儀者無遠慮可申上事

一諸役人初末と追進退之儀調方等仕法不崩様規定懸り申談、依怙
最負無之様可致事

（下札）「此御仕法不崩様との御主意も調所ニ御意被為置候御仕

法ニ御座候」

一領知向・勝手向共入念末と追私曲無之様心附可取計事

一女中向取計之儀是追之通相定仕法不崩様立置可申事

右之條と相守精入取計可申事

本史料では、世子治国（刑部卿）と家老への教諭が行われている。治国へは「廉立候儀者役人共其元江も伺可申候得共、尚又此方江も伺候積候間、兼而被心得候様存候事」とあるように、重要事項については役人から治国・治済の双方に何う場合があることがあらかじめ示されている。治済が飯田橋邸への移動と同時に一橋家の運営から完全に手を引くのではなく、一定程度関与し続けようとしていたこと、すなわち程度は不明だが本邸（治国）と飯田橋邸（治済、実質的な「隠居所」と言えよう）との二元的な家政運営を行うことが前提とされて

いたことが読み取れる。一方で治国へは「家政之儀も追々相譲候存寄」、家老へは「家政之儀者通例之儀者刑部卿江伺取計申候」と示されている通り、治済が寛政四年時点で一橋家の意思決定に関わりつつも、「通例之儀」（定期的・定例的な儀式や家政業務とみられる）は治国に任せるというように、段階的な家政運営の委譲を志向していたことがわかる^{二八}。

しかし、寛政五年に治国が死去したため、治済六男斉敦を後継とし、治済は同一年に隠居している^{二九}。治国の死去のため、治済の隠居が延期になっていたとみられる。寛政十一年正月二十七日に至って治済の隠居が許可され、これに伴って治済の官位が中納言から大納言へ上がるとともに^{三〇}、隠居後の賄料として毎年米五万俵が支給されることとなった^{三一}。

第三節 「隠居所」の職制

一橋家「隠居所」の職制については、「治済附」の「側用人」、「番頭」、「用人」が置かれたことが知られている^{三二}。文政八―一〇年（一八二五―二七）頃の作成とみられる「一ツ橋御目見以上以下高席順」^{三三}を検討した武子裕美氏の研究によると、「神田」（「神田橋」＝「隠居所」とある役職は一一（二七人）あり、「用人」「目付」「徒頭」「小十人頭」「書院番組頭」「頭役」「書院番」「小十人組支配」（「支配」は「与頭」か）「小十人組」「徒組頭」「徒」であったことが表で示されている^{三四}。しかし以下で述べる通り、他の史料ではこれ以外の「隠居所」の役職が確認

でき、「一ツ橋御目見以上以下高席順」では、家臣のうちで「隠居所」での職務に従事していた者が、明確に区分して記されていない場合があったとみられる。

文政八年の状況をもとに記されたと推定される神田橋邸の「神門分限帳全」^{三五}をみると、治済附「用人」など、治済附の家臣の役職・名前・禄高が記載されている^{三六}。本史料にみえる役職と人数をみると、一橋家家老を筆頭に記載されており、一一一役職・五九〇名（女中四五名）がみられる。役職には番頭、用人、小姓、近習番等がみえるが、本邸におかれた勘定奉行・旗奉行・郡奉行等の役職はみられない。本邸と「隠居所」とで役職の構成が異なる理由としては、後者が所領と関係しないことに加えて（後述）、職務・儀礼面の相違によるものとみられる。

なお、武子氏論文の表によると、前述の「一ツ橋御目見以上以下高席順」にみられる家臣は全一四二八名である^{三七}。役職の肩書には明記されていないものの、前述した一一の「神田」の役職だけでなく、この一四二八名の中に「神門分限帳全」の人員が含まれていた可能性が高いとみられるが、その場合、全体の約四一・三％が「隠居所」・「治済」付きであったことになる。更なる分析が必要であるが、寛政期から文政一〇年までの「隠居所」のおおよその規模や治済の権勢の大きさ^{三八}をこれらの数値からもうかがうことができよう。

第二章 近世後期の「橋家財政と「隠居所」

第一節 寛政一二年度「神田橋勘定目録」の内容

本節では「神田橋勘定目録」の「金方」・「米方」の収支項目をみていく。なお、隠居した治済に対しては、寛政十一年（一七九九）に賄料五万俵（一万七五〇〇石）・年金五〇〇〇両が毎年与えられることとなり、翌年に年金は八〇〇〇両に増額されている^{三九}。

「金方」の収支項目を【表1】、【表2】にあげた。なお、本稿で揭示する表には「米成替」や「金銀成替」という項目が度々みられるが、これは金を銀で購入するなど、米や貨幣を別の形態へと両替したものである（両替レートは煩雑となるので省略した）。

【表1】「隠居所」の「金方」収入の大部分が幕府からの給付である。この内訳は年金（被進金）八〇〇〇両と合力米の払米代金が大半であり、後者の多さが注目される。なお、収入項目のうち、史料上では「一橋御金方入」の払米代金が金一六二二両と銀一四・六七匁みられ、一橋家本邸から移動された資金であるようにみえる。しかし、一橋家本邸の「一橋勘定目録」の「金方」支出をみると^{四〇}、「御米代 是者神田橋御合力米之内、一橋御入用相成候分、石壺両之積りを以神田橋江相廻り候分」として金一六二二両と銀一四・六七匁が確認できる。詳細は不明だが、もともと「隠居所」（神田橋）への合力米であったものを本邸の入用にあてることとしていたが、何らかの理由で再度「隠居所」財政へ回されたものであるとみられる。なお、「隠居所」の収入項目に一橋家領の年貢収入は含まれていない。後述する通り、年貢

収入は一橋家本邸の財政で使用されており、「隠居所」財政は所領や都市商人との直接的な関係をほぼ有していなかったとみられる。

【表2】「隠居所」の「金方」支出をみると、6納戸頭、7賄頭、

表1 寛政12年度の「神田橋御屋敷」収入（「金方」）

項目	金額(両)	銀額(匁)	銭額(文)	大板金
前年残高	2,384.250	36.084	2,831	
「被進金」(幕府よりの給付)	8,000.000			
「合力米」代金(幕府よりの給付)	10,748.000	50.640		
「合力米」代金(一橋本邸より受取、本来は隠居所への合力米)	1,621.000	14.670		
商人の「前借金」返納	1.625			
納合(収入合計)	22,754.875	101.394	2,831	
右金銀成替(貨幣の両替、省略)				
差引 御遣方元高	22,592.375	1,149.504	557,328	3枚

典拠：享和2年9月「神田橋 寛政十二 申年米金納拂御勘定目録下札帳」(一橋G1-3)

9・10庭奉行等への生活にかかわる費用、儀礼関係費用（19・29・31・35）の費目の多さが注目される。また、2・11「一橋」本邸への資金移動がみられることは注目される^{四一}（後述）。

寛政一二年度の「隠居所」の「金方」単年度収支（当年残高）【表1】「差引御遣方元高」マインス【表2】「渡合（支出合計）」から前年残高（【表1】を引いたもの）は、金五二〇九両二分、銀三九・二八八匁、銭一二貫一五二文となる。一橋治済と第一一代將軍家斉（治済長男）との密接な関係を背景とした多額の賄料・年金をもとに、単年度収支では大幅な黒字を計上している。

表2 寛政12年度の「神田橋御屋敷」支出（「金方」）

項目	金額(両)	銀額(匁)	銭額(文)
1 御小納戸金渡	3,000.000		
2 一橋御遣方江入	3,000.000		
3 御廣敷御用人渡	1,187.250		55,967
4 御内証様江 被進金	100.000		
5 御普請奉行渡	418.250		28,357
6 御納戸頭渡	1,654.750		43,786
7 御賄頭渡	1,424.250	687.060	272,877
8 御馬役渡	286.000		16,785
9 神田橋御庭奉行渡	622.250		33,641
10 神田橋御庭奉行渡	66.500		29,868
11 申年中御給金女中御切米金御合力金御役金類新組並小遣之者共諸渡物一橋より相渡候分、一橋江相戻ス	1,297.875	10.202	
12 御目付渡 是者大川筋御川狩之節差出候川船賃	3.250		738
13 諸向渡	7.750		5,753
14 一橋外侑(カ)地江御成之節 御立寄ニ付 諸色御入用渡	11.250		3,058
15 一橋外侑(カ)地江 御成之節神田橋 御屋形江御立寄ニ付 諸色御入用渡	374.000	41.400	6,154
16 田安 御屋形江御立寄ニ付 御入用渡	5.750		2,336
17 大納言様御水痘ニ付 御入用渡	3.500		1,464
18 御台様神田橋 御屋形江 御立寄ニ付 諸色御入用渡	570.750	74.000	6,458
19 淑姫君様御輿ニ付 諸色御入用残金渡	11.500	8.000	3,010
20 五百姫君様御誕生ニ付 諸色御入用渡	17.250	47.600	4,070
21 峯姫君様御誕生ニ付 諸色御入用渡	39.250	63.900	2,117
22 尾張中将様御家督ニ付 諸色御入用渡	4.250		933
23 久之助様御宮ニ付 諸色御入用渡	196.750	95.670	3,416
24 久之助様御髪置御祝儀ニ付 諸色御入用渡	63.000	31.000	3,385
25 本之丞様御誕生ニ付 諸色御入用渡	25.250		2,847
26 本之丞様御箸初御祝儀ニ付 諸色御入用渡	48.750		1,654
27 久之助様・本之丞様御旒(カ)御用 諸色御入用渡	46.500		2,684
28 紀姫様御逗留ニ付 諸色御入用渡	88.500		1,330
29 田安 近姫様御誕生ニ付 諸色御入用渡	23.750		320
30 濱町御屋敷御普請ニ付 諸色御入用渡	279.250		3,132
31 大猷院様百五十回 御忌御法事ニ付 諸色御入用渡	8.000	15.300	687
32 有徳院様五十回 御忌御法事ニ付 御入用渡	1.250		1,229
33 塋(カ)光院様御新葬 御法事ニ付 御入用渡	1.250		1,011
34 悦現院様一回 御忌御法事ニ付 御入用渡	0.250		687
35 尾張大納言様御逝去ニ付 諸色御入用渡	10.500		2,527
36 拝借金渡	100.000		
37 渡合(支出合計)	14,998.625	1,074.132	542,345

典拠：一橋G1-3 註：銭の合計額が一致しないが、史料上の表記に従った。大板金が項目6(2枚)・22(1枚)において計上されており、合計では3枚となる。

米（5〜7）が全体の約六四％を占めている。なお、【表3】12、13は一橋家の本邸の収入項目にも記述されている（後述）。「米方」の残高は二六七・七二九一四石であり、幕府の浅草御蔵に預けられていた。「米方」の単年度収支（当年残高マイナス前年残高）は米一〇四三石余の赤字であったが、これは一橋家本邸への米の移動と大きく関係していた（後述）。

本節において、寛政一二年度のみではあるが、「神田橋勘定目録」にみえる「隠居所」財政の「金方」・「米方」の内容を検討してきた。「隠

次に、「隠居所」の「米方」収支項目をみていく【表3】。「米方」収入の内訳は前年残高と幕府からの「合力米」であり、支出は扶持に完全に依存していたことがわかる。

表3 寛政12年度の「神田橋御屋敷」収支（「米方」）

項目	米(石)
収入	
1 未年残高 浅草御蔵より請取	1,311.03886
2 申年御合力米 浅草御蔵より請取	8,750.00000
3 未年御合力米之内より出目米之分入	5.30000
4 申年御合力米之内より出目米之分入	4.12500
A 納合	10,070.46386
支出	
5 三季御切米之分(是者一橋より相渡候ニ付、相戻シ候分)	4,091.70000
6 定御扶持方之分(是者一橋より相渡候ニ付相戻シ候分)	2,115.97297
7 御役扶持之分(是者右同断)	61.68750
8 諸席飯米之分(是者右同断)	486.78465
9 御膳米之分(是者右同断)	15.06700
10 御膳粗米納候村々江為御手当被下候分(是者右同断)	4.12835
11 申年中御入用ニ相成候太餅米代り之分(是者右同断)	31.87900
12 是者未年御合力米之内、申年中一橋御入用ニ相成候分	151.66000
13 是者申年御合力米之内右同断	1,292.05139
14 未年御合力米之内御拂	1,160.84100
15 申年御合力米之内御拂	382.40000
16 欠米	8.56286
B 渡合	9,802.73472
C 差引残而 浅草御蔵預有之 申十二月廿九日有高(A-B)	267.72914
単年度収支(C-〈1〉)	-1,043.30972

典拠：一橋G1-3 註：なお、「神田橋勘定目録」の「米方」には、「米」以外の「白米」や「玄米」などの項目はみられない。

をみていく。第一章第一節で述べた通り、一橋家本邸の「金方」は「一般会計」と「別記項目」（一橋家の債務・積立金等）の二つに分かれている。

【表4】【表5】より一橋家本邸「一般会計」の「金方」「米方」収入の内訳をみると、「隠居所」財政とは異なり、所領からの年貢米・年貢金銀の占める割合が最も大きいことがわかる。一方で、【表4】（「一般会計」の「金方」収入）においては、「神田橋」（治済「隠居所」）からの資金移動（20、21）が四二九七両余みられる。そして、「一般会計」の「金方」支出のうち「隠居所」財政と関連する項目としては、前節で述べた一橋家本邸から「神田橋」へ回された合力米代金（金一六二二両と銀一四・六七匁、本来神田橋への合力米として幕府より給付されたもの）以外に、「神田橋江被進金」一〇〇〇両がみられた^四。

【表5】（「一般会計」の「米方」収入）においても、「神田橋」からの米一四四三石余（14、15）がみられる。また、【表5】16は【表3】（「隠居所」財政の「米方」収支）5～11（「米方」支出）の一部の合計と等しく、「是者一橋より相渡候ニ付、相戻シ候分」とあることから、これらの金額は一橋家本邸から「隠居所」に渡されたものが本邸へ戻ってきたものである。少なくとも寛政一二年度には、「隠居所」附の家臣の扶持米や「諸席飯米」が一旦は一橋家本邸から支払われていたことがわかる。【表3】5～

第二節 「神田橋勘定目録」と「一橋勘定目録」の関係
本節では、寛政一二年度「一橋勘定目録」から一橋家本邸の財政構造を概観するとともに、前節で明らかにした「隠居所」財政との関係

13（「隠居所」「米方」支出の一部）の合計八二五〇・九三〇八六石は

表4 寛政12年度の「一橋勘定目録」における「一般会計」の「金方」収支

項目	金(両)	銀(匁)	銭(文)
1 末年残高	12,469.750	786.660	184,215
2 泉州・播州未御年貢小物成共		265,903.105	
3 泉州・播州未口米石代口銀共		35,204.430	
4 泉州未水車運上	5.000		
5 播州未御年貢御拂米代		138,752.428	
6 遠州未御年貢小物成共	124.000	5.490	
7 遠州未口米石代口永共	390.000	12.930	
8 遠州未御年貢不熟米石代	1,725.000	13.130	
9 遠州未御廻米納不足切石代	134.750	21.360	
10 遠州未水車運上	0.250	12.000	
11 遠州未御年貢御廻米之内御拂米代	6,008.250	167.200	
12 泉州・播州申御年貢		484,945.000	
13 播州申御年貢御拂米代		349,880.700	
14 遠州申御年貢	1,450.000		
15 遠州申御年貢御廻米之内御拂米代	6,011.250	99.520	
16 関東申御年貢	3,492.000		
17 乗蓮院様江 御手当金蓮池御金蔵より請取	3,432.000		
18 子■(年増)御附人元高之分浅草御蔵より請取	241.000		
19 右同断御給金元高之分蓮池御金蔵より請取	40.000		
20 神田橋御金之内より入	3,000.000		
21 申年中神田橋附御給金女中御切米金御合力金、御役金類新組並小遣之者諸渡物共、一橋より相渡有之候ニ付、神田橋より戻り候分	1,297.875	10.202	
22 諸向上納	1,497.000	1,181.355	118,495
23 諸向拝借返納出目銀共御遣方江入	231.250	1,469.283	
24 納合	41,549.375	1,278,464.793	302,714
25 金銀成替(貨幣の両替、省略)			
26 除金	-554.750	-191.140	-114,150
27 差引 御遣方元高	60,652.875	6,440.485	1,752,709
28 渡合(支出合計)	-48,553.000	-5,465.990	-1,712,116
29 差引残而 申十二月廿九日有高	12,099.875	974.495	40,589
単年度収支(29-1)	-369.875	187.835	-143,626

典拠：享和2年9月「寛政十二申年米金納拂御勘定目録下札帳」(G1-2)
註：大板金が項目1(1枚)・27(8枚)・28(-7枚)において計上されており、合計(項目29)では1枚となる。銭の合計額(「納合」)が一致しないが、史料上の表記に従った。

全て本邸へ渡っているものであり、支出合計の約八四・二%にものぼる。以上の点から、一橋家本邸と「隠居所」とが米・金をやりとりしており、「隠居所」からみると、「米方」において本邸との関係は特に

大きな比重を占めていた。また、【表1】～【表5】からは、本邸と比べて「隠居所」の財政規模が小さい(三分の一程度)こともわかる。一橋家本邸と「隠居所」との米・金のやりとりについて、本邸「一

般会計」の「米方」は「神田橋」からの「合力米」の移動がなければ大幅な赤字となるはずであり、「隠居所」財政の「米方」は本邸への「合力米」等の渡しによって赤字となっている。そして、本邸「一般会計」の「金方」は、「神田橋」からの資金移動により赤字が四〇〇両弱となっている。

上記の通り、一橋家本邸(「一橋勘定目録」と「隠居所」(「神田橋勘定目録」)との間においては、双方向的な米・金の移動がなされていた。「隠居所」財政は一橋家の財政全体における資産または負債の一部となるものであり、寛政期から文政一〇年までの一橋家財政においては、本邸と「隠居所」の二部門が並存していたとみられる。以上の二部門の数値を合計すると、

α 寛政一二年度会計を終えた一橋家

表5 寛政12年度「一橋勘定目録」における「一般会計」の「米方」収支

項目	米(石)	白米(石)
収入		
1 末年残高	3,951.55317	23.82474
2 遠州未御年貢	2,817.72638	
3 関東未御年貢	724.12780	
4 遠州申御年貢	6,891.62450	
5 関東申御年貢	2,890.10420	
6 御買上米	4,706.65160	
7 諸向返納米	2.23500	
8 末年出目米之分御遣方江入	165.22600	
9 申年出目米之内御遣方江入	446.60950	
10 末年差出来米之分御遣方江入	5.50900	
11 申年差出来米之内御遣方江入	1.81000	
12 申年差出金米之分御遣方江入	1.32200	
13 増御附人御切米御扶持方共元高之分浅草御蔵より請取	213.41484	
14 末年御合力米之内御金ニ成り替御遣方江相廻り候分	151.66000	
15 申年御合力米之内右同断	1,292.05139	
16 神田橋附御宛行并諸席米之分御合力米之内より入	6,807.21947	
17 納合(前年残高+収入)	31,068.84485	23.82474
18 右米成替(米の両替、省略)		
A 差引 御遣方元高	28,821.57385	2,021.27427
支出		
19 三季御切米渡(このうち「御買上之分」4,321.3316石)	7,091.59360	
20 不時御切米渡	185.26400	
21 取越不時御切米渡	1.75000	
22 定御扶持方渡	7,375.71400	
23 諸渡方(このうち「御買上之分」385.32石)	1,184.08400	
24 御膳米渡(御膳白米84石)		
25 御賄頭渡(太餅白米83.22石)		
26 右同断渡		1,819.93659
27 善修院様 右同断渡		52.60800
28 御内証様 右同断渡		50.11200
29 御膳粗米納候村々江御手当被下候ニ付、御合力米之内にて差次浅草御蔵江相納候分	24.66000	
30 遠州米御拂	9,228.51000	
31 御鷹場廻り御餌付粗米渡(粗米14石)		
32 清水徳兵衛渡(粗米37石)		
33 欠米	1.50900	
B 渡合	25,093.08460	1,922.65659
C 差引残而 申十二月廿九日有高(A-B)	3,728.48925	98.61768
D 単年度収支(C-「1」)	-223.06392	74.79294

典拠：一橋G1-2 註：本表にはいずれの項目も200石未満と数量の少なかった太餅米、粗米、御膳白米、太餅白米の数値は掲載していない。なお、それぞれのD単年度収支については、太餅米7.981石、粗米12.5石、御膳白米6.164石、太餅白米2.913石である。

財政全体での「金方」の「残高」の合計(【表1】「差引 御遣方元高」+【表2】「渡合」+【表4】「差引残而申十二月廿九日有高」)は金一万九百九十三・六二五両、銀一貫四十九・八六七匁、錢五十五貫五七二文、大板金一枚となる。このαから前年度の「残高」(【表

1】「前年残高」+【表4】「末年残高」)を引いた「金方」単年度収支は金四八三九・六二五両、銀二二七・一二三匁、錢マイナスイ三一貫四七四文となる。β寛政一二年度会計を終えた一橋家財政全体での「米方」の残高の合計(【表3】「差引残而(中略)申十二月廿九日有高」+【表5】「差引残而

申十二月廿九日有高」)は米三九九六・二一八三九石となる。このβから前年度の「残高」(【表3】「末年残高」+【表5】「末年残高」)を引いた「米方」単年度収支はマイナスイ二六六・三七三六四石となる。

寛政一二年度会計を終えた後にも、一定量の米・金が一橋家のもとに残っており、さらに単年度収支は「金方」と「米方」とを合わせて考えると、全体としては黒字を計上しているとみてよいであろう。筆者は以前、拙稿において寛政一二年度の本邸財政の「金方」

単年度収支をマイナス三八九両余と示したが^{四三}、「隠居所」財政を含めると一橋家財政全体では「金方」の単年度収支の赤字が黒字へと転換することとなる。「米方」単年度収支での「隠居所」の赤字の大きさをふまえても、少なくとも寛政一二年会計においては、「隠居所」の存在が一橋家財政全体の収支にとってプラスに働いているということが出来る。

なお、寛政一二年年度の本邸財政の「金方」「別記項目」(「右之外御金蔵ニ有之分」)の合計は、金一万九〇七両二分二朱、銀五貫七七八・九六二匁と、銭がマイナス四五貫三五〇文である^{四四}。別記項

目の「出高」(一橋家の債権)で最大の金額である「諸向拝借金出高」(金三三〇七両三分と銀一一・四三二匁)のうち、一〇〇両は申年中の「神田橋御金之内方拝借金渡」とあり、神田橋財政から一部移動されたものとみられる。この他、別記項目の「御除金有高」のうちに「神田橋御庭奉行納」金四両二分二朱、銀七・五匁、銭一貫二五六文がみられるが、詳細は不明である。

第三節 一橋家財政における「隠居所」と一橋治済の認識

前節では、一橋本邸財政と「隠居所」財政の関係を数値の面から追究してきた。本節では、一橋家財政の中で「隠居所」が占めた位置や、本邸財政と「隠居所」財政に対する一橋治済の認識を史料上の記述から分析する。前節までの数量分析と本節における史料文言の分析の双方をふまえることで、限られた史料的条件のもとではあるが、一橋家

の「隠居所」財政の特徴や意義をより明らかにすることができると考える。

寛政一文政期の一橋家本邸と「隠居所」との並存について、一橋治済は寛政一二年(一八〇〇)時点でその弊害を認識していた。【史料2】は寛政一二年二月一日「新組並之者御増人御書」であり、同史料は治済からの家政への指示を記した「御書」等をまとめた「最樹院様御筆写 下」に収録されている。

【史料2】^{四五}

寛政十二年庚申十二月十三日

(勘定奉行新直右衛門カ)

直右衛門認出し候別紙之趣尤之儀ニ存候、あの通ニ而者心得違之者も出来不致、新組並之者増人申付候儀可然と存候、然ル処両屋形同日ニ出殿而已ニ無之、折悪敷打続候節、今日も供ニ而早出、又者居残夜ニ入帰宅いたし、又明日も出、又と供等勤候儀、兼而之覚悟与違あくみ候様ニも成り行可申、左候時者末と病人忤も出来、自然与不勤ニも可相成、其上此方とも出殿之節、心遣ニ有之

民部卿方者勤向も有之候へ共、此方勤も急度無之事ニ候へ者、別而心遣ヒニ存候、折角今般御手当も被成下候へ者、半分通り右之出方ニ相成候へ而も可然候、調通りニ而者三分一も出方無之候へ者、堅帳調通りニ而可然候、且又神田橋者人少ナ之事故、別帳勤之上下ニ寄褒美等者有之可然と存候、尤神田橋勤之者人少ナと申趣ニ成り候へ、可然と存候、且又目付支配之分者一ヶ

年少、神田橋之方持切引多之節者、両屋形ニ而融通いたし可然
と存候、孰ニも来春ニ至り部屋と之処も勘弁有之候様、（用人丸山勝五郎カ）勝五郎
江も噺置可然候

一尾州其外諸家杯江参り候節も、新組方介之者多相成候而者、自
然与様子も相知レ手薄之儀与存候

本史料が作成された具体的な経緯は不明だが、冒頭の「直右衛門」
は一橋家勘定奉行の新直右衛門とみられる。そして、同人が差し出し
た書類を見た治済が「尤之儀」と述べ、これ以降一橋邸および神田橋
邸の家臣の出勤状況や勤務態度についての治済の見解が述べられてい
る。このことから、治済が一橋家の財政や家臣の勤務について、勘定
奉行に状況を確認し、指示を出す中で作成された史料の一つであると
みられる。なお、一橋家は寛政一〇〜同一二年まで三年間の俸約期限
であったが、さらにこれを三年間延長しており四六、【史料2】は俸約
や家政の見直しがなされていた時期に出されたものである。

本史料では、二代隠居治済および三代斉敦が同日や連日での「出殿」
を行う場合、「供」の者の負担が増大していること、「神田橋勤之者」
が少ないため、「両屋形」の間で家臣の出勤等を「融通」すべきである
こと、それらのことから、詳細は不明だが一橋家家臣―「新組並之者」
を増すべきとされていることなどが記されている。家臣の出勤等の「融
通」は、前章までみてきたような財政面だけでなく、人員の面でも
一橋邸と「隠居所」が双方向的な関係を有していたことを示している。
次に、文政五年（一八二二）五月二〇日に、一橋治済が治済附の重

役である河原隼人四七へ「一橋家と「隠居所」の財政改善の方針を伝えた
「御勝手向御改正之御書」（「最樹院様御筆写 下」収録）を示し、治
済が一橋家における本邸と「隠居所」の並存についてどのように認識
していたのかを検討していく。

【史料3】四八

文政五年五月廿日河原隼人江

一神田橋勝手方之儀者、（治済カ）此方生涯之事二付、実者一ヶ年二箱余充
も残り候得者無差支事二候、併右之趣ヲ表江顕シ候而者、油断
も出来致し、一ツ二者一橋江も自然与響キ候事故、随分向と省
略之心得可有之者勿論二候得共、内と者前書之趣心得候而取扱
可然事

一「一橋之方者永統之事二候間、領知収納并当時

御本丸方暮ニ至り相廻り候利金ニ而、少とツも残り有之、翌
年之収納以後迫貯ニ相成候様致度者二候、猶得与勘考之上可申
聞候

但一両年二者無覚束与存候

一先年此方江年と老万両拝領被 仰付、夫方収納之高与打込、其
頃初之内者年と御取替与唱候米金有之候得共追と相止、有余出
来候歟と存候、尤當時者御簾中有之候得共、先年与違子供も栄
姫計之事二候、乍去追と考見候処、先年婚姻已前之子供之様子
与違、自然御簾中之振合ヲ而已准シ候様ニ被存候、右等之処
者又老女共心得方之達しも可有之歟、先年紀姫手前二居候節之

一ヶ年入用与當時を見合候ハ、相分可申事与存候、其外何レも心附候事者可申聞候

一諸士方未と迄分限高者大株ニ候へ共、是者六ヶ敷事ニ而、人数を減候而者取締ニも拘り、数年勤功之者又者部屋住之者も無抛類者呼出し候事も有之候間、是又無抛事ニ候、尤都而之儀諸向痛ミニ不成、無益之事仕来ニ而も改正有之様ニ致度候、横尾六右衛門、大林与兵衛抔者向と彼是と批判致候由ニ者候得共、當時与違難渋之時節ヲ取計候儀、あれ程ニ無之而者参り兼可申、當時者程能取計候ハ、行届可申哉、向と方申出候事を其俣ニ通し候ニ者、自ラ入用嵩ミ、さも可相成与存候、依之大意之处申達し候間、厚勘弁之上可申聞候也

本史料では、「隠居所」は治済一代のことであり、「二箱」(二〇〇〇両)の残高で十分であると治済が認識しており、「一橋」への「響」とならないよう、「隠居所」の「省略」を指示している。一方で、「一橋」は「永統」のものであり、「領知収納并当時御本丸方暮ニ至り相廻り候利金」とある通り、年貢と幕府への「預け金」利子(第一章第一節)による財政運営を志向していた^{四九}。そして、治済は家臣の多さは止むを得ないとしつつも、「尤都而之儀諸向痛ミニ不成、無益之事仕来ニ而も改正有之様ニ致度候」とある通り、家政において「無益之事」がみられると考えており、家臣とのせめぎ合いの中でこの改善を志向していたのである。

なお、本史料の約一ヶ月後の文政五年六月二六日には、一橋家家老

の曲淵甲斐守^{五〇}から、近年の日光社参もあつて財政が「御繰廻シ不容易」な状況となつてゐることが述べられている^{五〇}。これらの点から、文政期にも、一橋家内―少なくとも治済と重臣層においては、財政改善の必要性が一定程度意識されていたことがわかる。

はじめにでも述べた通り、文政一〇年の治済死去以降の時期における「神田橋勘定目録」は残存せず、「隠居所」と一橋家本邸という二つの会計体系が一本化されたとみられる。辻達也氏によると、天保二年(一八三一)には神田橋邸の一部が一橋邸に囲い込まれ、神田橋邸の残りの土地は、天保七年に田安家三代当主斉匡が拝領している^{五〇}。

おわりに

本稿では、一橋家の「隠居所」財政と、これへの一橋治済の認識について分析を加えた。「隠居所」は治済存世時のみ設置されており、文政八年(一八二五)の「隠居所」付きの家臣は五九〇名(一一一役職)であつた。これは第一章第三節でみた通り、先行研究で述べられる一橋家の家臣全体の約四一・三%にあたる。「隠居所」付きの家臣は本邸の家臣とは異なる役職構成であつたが、これは「隠居所」が所領と直接的な関係をほぼ有さないことと、本邸と「隠居所」との儀礼や職務の相違に基づくとみられる。そして、本邸・「隠居所」双方の職務に従事する家臣の負担の大きさなど、本邸・「隠居所」の並存によって生じる問題を一橋治済は認識し、この改善を志向するとともに、晩年の文政期においても家臣とのせめぎ合いの中で家政の改善を模索し

ていた。

「隠居所」の財政と一橋家本邸の財政との関係について、寛政一二年（一八〇〇）度の「神田橋勘定目録」によると、その収入は幕府からの拝領金・合力米が大半を占めていた。そして、同年度の「一橋勘定目録」をみると、「隠居所」と本邸との間で資金・米の双方向的な移動がなされている。「神田橋勘定目録」が一冊しか残存せず、また「一橋勘定目録」も寛政一二年以降は天保期以降のものしか残存していないため、詳細は不明である。ただし、【史料2】のような一橋邸と「隠居所」との間での家臣の出勤等を融通することに関する記述からも、ある程度両者の間で人材や資金・物資をやりとりしていたことはわかる。そのため、このような資金・米の移動も寛政期→文政一〇年まで一定程度みられた可能性が高く、寛政→文政期には、「隠居所」の財政が本邸の「資産」あるいは「負債」として機能する側面があったと筆者は考えている（寛政一二年度は「資産」として機能）。

次に、「一橋勘定目録」を題材として一橋家財政について検討した拙稿^{五三}と本稿の成果との関係を整理しておく。はじめにと第一章第一節で述べた通り、拙稿では、文政一〇年の大規模な所領替によって年貢収入が増加した点や、天保改革に伴う幕府との関係の後退と所領との関係の深化等の点を指摘した。そして、文政一〇年以前の一橋家財政については、幕府に支えられていた側面が大きかった点を述べたが、寛政期→文政一〇年については、「隠居所」財政を含めるとこのような側面をより高く評価する必要がある。そして、このような側面が、

文政一〇年の治済死去^{五四}「隠居所」そのものおよび「隠居所」への幕府からの援助の廃止を契機に大きく転換するとみられる点は、一橋家財政を考えるうえで重要である（第一章第一節で述べた通り、文政一〇年には大幅な所領替も実施されている）。一方で、一橋家財政の恒常的な黒字傾向、一九世紀初期までの拝領金・拝借金への依存体制、文化→天保期の「預け金」利子の重要性、天保改革期の一橋家財政の性格の転換といった議論の大枠は基本的に維持される。

本稿の成果と先行研究との関係について、従来は一橋治済による天明期の邸制改革^{五五}、治済と老中田沼意次・松平定信との関係や一〇代将軍家治死去以降の幕政への関与等が注目されてきた^{五五}。しかし、治済は文政一〇年まで存命であり、本稿で述べた通り、隠居した寛政末年以降においても家政改善の必要性を明確に認識し、様々な取り組みを行っていた。前述の拙稿で明らかにした文化期以降の一橋家から幕府への「預け金」利殖の事例（本稿第一章第一節）等もふまえると、寛政期以降の治済の財政・家政にかかわる取り組みや、治済・一橋家と幕府との関係について、より深めていく必要性が指摘できる。また、領主財政論との関連では、本会計とは異なる別会計の中でも、藩主家の実際の人物がどのように財政を認識していたのかを明らかにした点（第二章第三節）は成果であると考ええる。

本稿での成果の反面、「隠居所」財政の規模や収支については、寛政一二年度的のみしか明らかにできていない。寛政→文政期における幕府からの臨時の拝領金や、儀礼等によって「隠居所」が大幅な黒字・

赤字を計上した年があった可能性も想定でき、さらに米価変動等による収入の上下、例えば「拂米」代金等も不明な点が多い。一橋徳川家文書において、「一橋勘定目録」と「神田橋勘定目録」の残存状況が限られている点から、これらの点は今後解明できない可能性もかなり高いと筆者は考えている。一方で、「隠居所」への幕府からの年金・合力米は毎年定額であるため、寛政一・二年度の数値を基準に議論することは一定程度可能であろうし、限定を付しつつ寛政一・二年度の数値を参照していくことが、史料の残存状況に鑑みて最も現実的な態度であると考える。

次に、本邸の財政と「隠居所」財政の運営の主導権は誰（家臣、一橋家当主、治済のいずれか）が握っていたのかという点は、「一橋勘定目録」、「神田橋勘定目録」には記されておらず、現時点では明らかにできない。しかし、一橋家当主が早世する事例が多かったこと（第一章第二節）、幕臣である上級家臣（家老・勝手掛用人など）は財政面において公儀に依存しようとする傾向が強かったこと^{五六}、一橋治済による必ずしも公儀に依存しない形での財政改善への試行錯誤（第二章第三節）から、隠居した治済の主導性を想定すべきと筆者は考えており、今後の検討が必要な点である。これに加えて、本邸と「隠居所」との間での資金移動の具体的な手続き、自由な資金移動ができたのか否かという点についても今後の課題として残されている。

以上の通り、本稿は前掲拙稿の補足という性格の強いものであり、史料的制約もあつて残された課題も多い。しかし、本稿の分析によつ

て、隠居・「隠居所」の財政の内実やこれと本邸・本藩財政との関係を追究することが、日本近世領主財政論の進展のうえで重要な手がかりになるであろうことを示すことができれば幸いである。

〔付記〕本稿はJSPS科研費若手研究一九K一三三三六の助成を受けたものである。史料調査にあたり、茨城県立歴史館の皆様には大変お世話になった。記して御礼申し上げたい。

註

- * 岡山大学大学院社会文化科学研究科講師
茨城県立歴史館所蔵一橋徳川家文書G一―一〇。なお、本稿では一橋徳川家文書を「一橋」と略記する。
- 一 一橋G一―一三。「隠居所」の語意は「隠居した人の住むところ」であり、「隠居屋敷」等と同義であるが（日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典第二巻』小学館、一九七三年、四五三―四五四頁）、本稿では一橋治済が隠居して居住した神田橋邸とその家臣や邸の機構を総称して「隠居所」と表現している。治済の隠居の過程や神田橋邸については、本稿第一章第二節で概要を述べた。
- 二 田中誠二『萩藩財政史の研究』（塙書房、二〇一三年）三四四頁。
- 三 前掲註（三）田中氏著書三七八―三七九頁。
- 四 伊藤昭弘『藩財政再考』（清文堂出版、二〇一四年）。
- 五 前掲註（五）伊藤氏著書第二章、第四章、終章。
- 六 鎌田浩『幕藩体制における武士家族法』（成文堂、一九七〇年）五頁では、農民の家における当主権が武士のそれと比べて弱い点が指摘されている。同書一七頁では、武士の隠居について「当主の補佐役的任に応ずることとはあるにせよ、隠居の親権は当主に対してほとんど及び得ない状態におかれている」とされている。
- 七 笠谷和比古『主君「押込」の構造』（平凡社、一九八八年）は家臣による主君の「押込隠居」を分析している。大藤修『近世農民と家・村・国家』（吉川弘文館、一九九六年）三一―三二頁では、武士当主の隠居には厳し

い条件があったこと、幕末期には少壮堅固な武士を確保する必要から、隠居制限が緩和されたことを述べている。

一 橋治済の幕政への関与や一橋家の邸制改革については、横山則孝「家斉の將軍就任と一橋治済」(『史叢』一一、一九六七年)、辻達也「一橋徳川家と御三卿」(同『近世史話』悠思社、一九九一年)二二〇～二二二頁、同「一橋治済の邸制改革」(『専修史学』二〇、一九八八年)、幕末期の徳川齊昭等の有志大名の国政参加については、鶴飼政志「ペリー来航と内外の政治状況」(明治維新史学会編『講座明治維新 第2巻 幕末政治と社会変動』有志舎、二〇一一年所収)を参照した。

一〇 岩崎義則「幕末平戸藩における隠居の表助成について」(『史淵』一四五、二〇〇八年)。

一一 辻達也「徳川御三卿の生活」(『専修人文論集』五三、一九九四年)、竹村誠「御三卿の領知変遷」(大石学編『近世国家の権力構造』岩田書院、二〇〇三年所収)、拙稿「近世後期の一橋徳川家における財政運営」(『ヒストリア』二五九、二〇一六年)。上記拙稿註(25)でも述べた通り、一橋家財政や前掲註(一一)の帳簿に言及したものであるとして、社会教育課市史編さん係編『蓮田市史通史編I』(蓮田市教育委員会、二〇〇二年、第三編第五章第二節、真下祥幸氏執筆)、高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史第二巻通史編近世』(高砂市、二〇一〇年、八六一～八六二頁、中川すがね氏執筆)、古賀康士「近世的殖産政策の生成と展開」(岡山地方史研究会・広島近世近代史研究会合同研究会報告、二〇一〇年六月二日)、同「近世的殖産政策の生成と展開」(『九州文化史研究所紀要』六二、二〇一九年)、真下祥幸氏の二〇〇三年度駒沢史学会大会報告(二〇〇三年六月二八日、真下祥幸「発表要旨三卿一橋家の財政について」『駒澤史学』六二、二〇〇四年、一一一～一二二頁)があり、社会教育課市史編さん係編『蓮田市史近世資料編II』(蓮田市教育委員会、一九九七年)一一三～一三七頁では嘉永元年度の財政帳簿(一橋G一六)が翻刻されている。

一二 前掲註(一一) 辻氏論文一九頁～一二六頁。
一三 前掲註(一一) 拙稿「おわりに」参照。
一四 享和二年九月「寛政十二申年米金納拂御勘定目録下札帳」(一橋G一一二)。
一五 前掲註(三) 田中氏著書、伊藤氏著書で論点として強調されており、一橋家でも一般会計と「別記項目」が分けて記述されていた(前掲註(一一) 拙稿第二章、第三章)。
一六 一橋領の成立については前掲註(一一) 辻氏論文一一〇～一一三頁、竹

村氏論文第二節、一橋家の所領替については竹村氏論文第二節と前掲註(一一) 拙稿第一章による。

一七 前掲註(一一) 辻氏論文、武子裕美「御三卿の家臣団構造」(『学習院史学』四九、二〇一一年)、田中丈敏「一橋徳川家邸臣団の形成過程」(『若越郷土研究』六〇、二〇一六年)第三章。

一八 町田哲「一橋領知上方支配と川口役所」(塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版社、二〇〇四年所収)一七九頁。

一九 明治三年六月四日「大坂御蔵元并御立入町人共之儀ニ付伺書」(明治三年頃)(帳簿「一橋G二二八」)。

二〇 前掲註(一一) 拙稿第一章第一節。江戸掛屋中井新右衛門については、田中康雄「寛政期における江戸両替商の経営」(『三井文庫論叢』二、一九六八年)も参照した。

二一 本段落での記述は註記がない限り前掲註(一一) 拙稿(特に第二章・第三章)による。

二二 前掲註(一一) 辻氏論文、特に同論文一九九頁。

二三 本節で述べる一橋家当主の系譜・履歴については、注記がない限り一橋家の歴年譜をまとめた辻達也編『新稿一橋徳川家記』(続群書類聚完成会、一九八三年)を参照した。

二四 九代当主慶喜の処分についての記述は、前掲註(二三) 辻氏編書四八四～四九七頁(特に安政五年七月五日条(四八四頁)、同六年八月二七日条(四九〇～四九一頁)、万延元年九月四日条(四九七頁))、および家近良樹「徳川慶喜」(吉川弘文館、二〇一四年)三三～四〇頁の記述を参照した。なお、前掲註(二三) 辻氏編書「新稿一橋徳川家記」は一橋徳川家文書の内容をもとにまとめられた一橋家の年譜であり、史料そのものの引用はなされていないものの、一橋家の事績を知るうえで非常に参考となるものである。

二五 御三卿では、当主不在(無主)のまま各家が存続されることがたびたびあった(前掲註(一一) 辻氏論文九一頁、辻達也「徳川御三卿の性格」第二節・第三節、同『江戸幕府政治史研究』続群書類従完成会、一九九六年所収)。

二六 本段落での屋敷の拝領や移動に関する記述は前掲註(一一) 辻氏論文第一章1・2による。

二七 寛政四年「飯田町江御逗留ニ付敬宗院様江御書并御家老江御書」(天明七文化一三年「最樹院様御教訓御書写 全」一橋A一〇二〇)。一橋A一〇二〇に収録されている文書の標題は、同史料冒頭の目次で記されているものを本稿では引用した。前掲註(二三) 辻氏編書の寛政四年正

月一九日条（二〇四頁）では、本史料等をもとに治済から治国への教諭や相続に関する意思表示があったことが記されているが、同編書が一橋家の年譜であることもあり、【史料1】そのものの引用はなされていないため、本稿で改めて示した。

二八 前掲註（二三）辻氏編書の寛政四年正月一九日条（二〇四頁）では、家老に思い止められたものの、治済には内々で治国に家事を譲りたいという意思があったことが記されている。

二九 前掲註（二三）辻氏編書による。笹目礼子「一橋治済の邸制改革にみる大奥整備」（『茨城県立歴史館報』四五、二〇一八年）三四頁註（一）では、治済の神田橋邸の拝領までの経過、治国に家政を譲る準備をしていたこと、治国の急逝により斉敦を嫡子としたこと、「隠居を申し出つつもこの当時未だ治済は一橋邸当主として家政の指揮を執っていた」と等が述べられている。

三〇 寛政一一年「御書付留 御目付」（一橋C一一一六）。

三一 前掲註（一一）辻氏論文一一一頁では、寛政一一年正月、治済に対して一年に賄料の米五万俵と金五千両が与えられることとなり、代わりにこれまで得ていた年金一万両と三代当主斉敦への賄料が廃止されたことが述べられている。前掲註（一一）竹村氏論文二〇一頁では、御三卿当主の隠居後は賄料や領知とは別に米・金が支給されており、「御三卿領は当主自身のためのものであるといえる」ことが指摘されている。

三二 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典 第6巻』（東洋書林、一九九八年）「御三卿重職者表 三橋」（三六五三頁）。

三三 一橋D一一四七。『一橋徳川家文書目録』（編集・発行茨城県立歴史館、一九八九年）の「解題」「一橋徳川家史料について」（辻達也氏執筆）二七一頁では、同史料の作成年代を文政八年八月〜同一〇年二月と推定している。

三四 前掲註（一七）武子氏論文の表1「一橋徳川家役職一覧」（五九〜六二頁）による。

三五 「神門分限帳全」（一橋D一一一〇）。治済附「用人」については、前掲註（三三）を参照した。前掲註（一一）辻氏論文一〇五〜一〇八頁では、「二代治済隠居後居住した神田橋邸の職制を記した「神門分限帳」（一〇五頁）を利用して、奥女中の職制が解明されている。前掲註（三三）『一橋徳川家文書目録』五八頁では同史料の作成年代は「（安政二年）」とあるが、本文の表紙・内容に「安政二年」の記述はなく、同史料の裏表紙の前の丁には「文政八年」と単独で書かれている。本史料の本文の冒頭にみられる土岐信濃守は文化八〜文政一一年

の一橋家老（文政八年八月六日、「一位殿御附家老」に就任）、本多大和守は文政六〜同九年の一橋家老である（『東京大学史料編纂所編纂「大日本近世史料 柳宮補任二」東京大学出版会、一九六三年、一〇頁）。文政一〇年に治済が死去する点からも、本史料は文政八年の「神田橋」邸の分限帳か、この写しとみられる。

三六 中村早知恵「一橋徳川家臣団の分析」（『茨城県立歴史館報』四六、二〇一九年）三八頁では「治済は隠居後、神田橋邸に移っており、その際に治済付家臣として神田橋邸へ配属された者もいる」こと、「一橋徳川家文書の中にはこの時神田橋邸付となった家臣の分限帳も残されており、今後はこの史料を中心に一橋家臣団の中でも彼らがどのような立場だったのかを明らかにしていく必要がある」と述べられている。本稿は一橋家財政における「隠居所」の位置と「隠居所」財政に対する一橋治済の認識を解明するものであるため、「隠居所」の家臣団についてはその総数等、必要最低限の言及にとどめる。

三七 前掲註（一七）武子氏論文表1。

三八 前掲註（九）横山氏論文、辻氏一九八八年・一九九一年論文。

三九 前掲註（一一）辻氏論文一一一頁。

四〇 前掲註（二四）一橋G一一二。

四一 【表2】1「御小納戸金へ渡」に関して、前掲註（一一）辻氏論文一〇二頁では「小納戸金（当主の日常生活費）渡し方」が一橋家用人の職務とされている。

四二 前掲註（二四）一橋G一一二。

四三 前掲註（一一）拙稿一八六〜一八七頁、【表4】。拙稿【表4】では寛政一二年財政の「米方」単年度収支をマイナス二二九・七八石としているが、この「米方」の数値は「米」以外の「白米」や「粳米」等も全て集計した数値であるため、本稿での数値（「米」のみの集計）と若干異なっている。

四四 前掲註（二四）一橋G一一二。

四五 寛政一二年二月一三日「新組並之者御増人御書」（天明四年〜文政五年「最樹院様御筆写下」一橋A一一一八〜一三）。一橋A一一一八〜一三に収録されている各文書の標題は、同史料冒頭の目次で記されているものを引用している。【史料2】中の人物の比定に際しては、前掲註（三三）小川氏編著三六〜四一頁を参照した。

四六 前掲註（三三）辻氏編書寛政一二年此月条（二三四頁）。

四七 前掲註（三三）小川氏編著三七頁では文政三年時点で河原は治済附の用人であり、同四二頁では文政九年時点で治済附の側用人兼番頭となつて

- いる。なお、河原隼人は文政八年七月二二日に近江守へ叙爵しており（前掲註（二三）辻氏編書三〇三頁）、文政一〇年六月一七日には、側用人兼番頭の職を病氣のため御役御免となっている（前掲註（二三）辻氏編書三一頁）。
- 四八 文政五年五月二〇日「御勝手向御改正之御書」（一橋A一―一八―三所収）。
- 四九 前掲註（一一）拙稿一九一頁において、【史料3】の一部を引用して、「一橋家の永続のためには、年貢収納と幕府への「預け金」利子という二つの手段による財政改善が必要との認識が当時から存在」していたことを指摘したが、「隠居所」財政や家臣の俸禄、家政における「無益之事」にかかわる箇所については言及しておらず、本稿で改めて史料の全体を翻刻・引用したうえで考察を加えた。
- 五〇 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典 第五卷』（東洋書林、一九九八年）二四八六―二四八七頁によると、曲淵は文政元年一月二八日に「橋家老」となり、同六年二月一日には留守居になっている。
- 五一 前掲註（二三）辻氏編書文政五年六月二六日条（二九六頁）、文政五年「御書付留 御目付」（一橋C一―三二）。
- 五二 前掲註（一二）辻氏論文七三―七四頁。
- 五三 前掲註（一一）拙稿。
- 五四 前掲註（九）辻氏一九八八年論文。
- 五五 前掲註（九）横山氏論文、深井雅海「天明末年における將軍実父一橋治済の政治的役割」（『徳川林政史研究所研究紀要』昭和五十六年度、一九八二年）、前掲註（二五）辻氏著書第一二章等。
- 五六 前掲註（一一）辻氏論文一二五―一二六頁。